

日本バプテスト聖書神学校
第60回卒業式
June 28, 2019 説教者 ケネス・ボード宣教師

神学校だより

JAPAN BAPTIST BIBLE COLLEGE
日本バプテスト聖書神学校

Contents 1

校長の机から

齋藤 秀文

卒業生の証し 卒論

香川 盛冶

恋田 寛正

新入生の救いと献身の証し

張替 道雄

Contents 2

教師紹介

石川 実

加治佐 清也

白井 清之

白石 公章

三谷 浩司

神学校の思い出

渡部 良次

喜美子

校長の机から

斎藤 秀文

金沢BBC



「神学」は英語で theology と言います。この言葉の意味は、その語源から「神を知る営み」のことです。特に「学的に神を知る」ことだと言えます。このように聞いても決して難しいと思わないで下さい。神を知るというこの営みは、実にいろいろな形で、また方法でなされているのです。ある人は、クリスチャンの救われた証を聞いたことから、神を知ることが始まったかもしれません。他の人は、人生の試練の只中で、神に叫び声を上げ、神の助けと憐れみを覚えたことが神を知る始まりであったかもしれません。様々なきっかけから聖書に聞く心が起こされ、神を知ったのかもしれません。

そのように私たちは、様々な場面（仕方）で神について、バラバラに知ったことでしょう。神についてバラバラに知ったこと、体験したことを聖書とキリスト教会の歴史の中で、一定の筋道を立てて考え、体系化することを「学的に」知るといことです。これはとても大切な作業です。何故なら私たちは、自分の隣人に対して、自分の信じている神について聖書を用いて、筋道を作り、弁明するようにと勧められているからです(1ペテロ3章15節)。それは、自分の依って立っている

ところが「どこか」を確認することだからです。このように聖書の神について筋道を立てて整理し、体系化して、神とその業を正しく弁明するための備えの作業が「神学する」と考えます。「学的に神を知る」作業の必要性は、神の御人格とその御旨を知らずに信じる信仰であるならば、いつの間にかキリスト教信仰ではなくなってしまう危険があると考えられるからです。

更に信仰とは何か、との問いが大切です。信仰には、三つの形態(信頼、服従、認識)があると考えます。まず信頼です。信頼には、二つの要素があります。相手の誠実に対する信頼と能力に対する信頼です。ですから信頼とは、相手が決して裏切らない誠実さを信じることで、その約束を果たす能力があると信じていることです。この神への信頼からくる確信が深く、確かなものとされた時、その信頼は、私たちを服従する者とさせます。それは、神が権威の究極的源であることを認めたからです。それらを支えるのが神を聖書から認識することです。この三要素が信仰であり、この信仰を確かなものにする作業が「神学する」ということです。

このように私たちは、神について順序立てて、体系的に知れば知る程、神を愛し、崇める生き方、服従する者へと変えられると信じます。心からの服従は、「従いなさい」と強いられるものではないと考えます。私たちは、新しい人「キリスト」を着た(ペソ4章20～23節)者として、御子イエスが従順を学ばれた

ように私たちも従順を学び続けるのです。

更に、神学校での学びは、神に愛されていることと、神を愛することを学び、私たちの隣人を愛することを学びます。主イエスは律法学者から、もっとも大切な戒めは何かと問われて、『イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。』(マルコ12:30, 31)と答えられました。

主イエスは、「どれが第一の戒め(単数)・・・」との問いに、神への愛と隣人への愛という二つの愛の戒めをお答えになりました。これは、この二つの戒めが不可分ということです(1ヨハネ4:20)。ですから、この愛を知らないで、またこの目的を離れて、単なる知的好奇心や自己満足や自分の学説開陳や自己礼賛のために神学をするとすれば、それは神学とは言えません。

このことは歴史的にも「バプテスト教理問答書」(1693年バプテスト・カテキズム)問44に「十戒の要約は何か」、答「十戒の要約は、我々の心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして主なる神を愛すること、自己を愛するように我々の隣人を愛することである」と告白しています。神を愛すること、私の隣人を愛するという二つは決して分離できないのです。

ですから神学校で学んで得る知識は、神の赦しという恩寵を覚え、神と隣人を愛する幸いを体系的に知ることです。これが宣教する動機となります。ここから遊離した宣教も伝道の働きもありません。パウロは、ギリシャ文化圏のコリント教会の兄弟姉妹に向かって、「知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てる」と警告しました。この時の知識とは、神を愛する愛と隣人を愛する愛とが遊離されたものだったのです。これらの知識は、「神学」とは言わないのです。

一方、私たちは、私たちを取り巻く環境(文化、価値観、世界観、思想など)から全く影響を受けない、完全に中立な人はおりません。ですから自分自身を神学校の学びを通して、できる限り客観的に見る経験は重要です。神学校での学びは、まさに今までの自分自身への問い直しであり、自分の考え方や価値観がどうなのかを確かめ、聖書信仰を構築し、確立するための学びです。自分の立場を体系化する備えが神学校の学びでもあります。その為には、私たちが置かれている時代をどのように解釈するか、これも大切な学びです。時代とともに思想も価値観も好みも激しく変化します。

この時代を聖書に照らして解釈し、指導する神学校の働き人が必要です。今年度の取り組みは、そのような働き人が新たに登用される準備の時と位置付けています。神学校での学びが用いられるものとなりますよう、お祈り下さい

卒業生の証し、卒論

2019年6月28日(金)神学校で第60回卒業式が行われ、2名の卒業生が伝道の一線に旅立ちました。卒業生には証しと卒論について書いていただきました。



卒業の証し

4年課程

浅間B B C

かがわ せいじ
香川 盛治

私は4年間、軽井沢町民として過ごしました。夏休みも神学校のご配慮をいただき、過ごすことができました。そのため過去の学生の中では最も神学校に長く滞在した学生であることを自負しております。

さて、私たち卒業生2名は、4年間の神学校の学びを石川実校長先生からいただくことができました。うわべではなく、真のころをもって神と人を愛すること、幼子のころをもって聖書のおことばをいただき、神と人に仕えることを何度も何度も聖書のおことばからいただきました。しかしながら、このことがようやくわかるようになってきたのは卒業の2か月前くらいからでしょうか。聖書の見方が一面的で、聖書の豊かさに気付かない者であることを思わされている日々です。その他にも先生方から多くの学びをいただくことができました。神学校であるからこそ学ぶ

ことができたものばかりです。心から感謝しております。

4年間は、今から考えるとあっという間でありましたが、そのただ中にいるときには困難も多くあったことを思い出します。経済的なこと、家族のことなど思いもよらない苦しみも経験しました。その度に聖書のおことばと先生方や学生によって助けられた経験は何よりの財産であったことを覚えます。

今後は伝道者として、一人の人間として、主の導かれるままに歩めればと願っています。

卒業論文

「賛美の歴史の変遷から見る課題と可能性
— 聖書神学的視点からの提言 —」

・動機

広辞苑によれば、賛美とは、「ほめたたえること」と同時に「賛美歌」と書かれている。ほめたたえることが、はたしてそのまま賛美歌であろうか。賛美歌自体は賛美するための道具ではないか。賛美にふさわしい音楽とは何かと論じるも明確な線引きを見出せなかったことによる。

・目的・方法

天田(1997)の4つの見解。「神賛美」(詩篇66:2)、「信仰告白」(詩篇40:3)、「祈願(祈り)」(詩篇42:8)、「感謝のささげもの」(詩篇28:7) この特質を基本にし、聖書からいただける要素4点において考察を行った。

①神の民が神ご自身を賛美しているか、

- ②神の民の感謝をもった捧げものであるか、
- ③神の民として、その瞬間、同じ目的をもって捧げられる一致した心をもっているか、
- ④信仰告白や神の民として、他に向けて宣言するものか

・結果

詩篇、そしてⅡ歴代誌5章を研究。また、エペソ5:18-20、コロサイ3:15-17に見られる「詩と賛美と霊のうた」を研究。

アウグスティヌスは、歌詞や賛美以上に音楽的要素を重要視することの危険性を認識していたことを確認。また、グレゴリオ聖歌の特徴から、同じ歌詞では飽き、その欲求を音楽的要素に求めた。それは、神への心からの応答や捧げものであるという点を軽視した。

ルター・カルヴァンは、会衆賛美の実現、世俗音楽を取り入れたコラル（賛美歌）や詩篇歌の作成、みことばの教育のための賛美としたことを確認。ルターはさらに音楽の地位を高いものにした。

英米信仰覚醒期は、伝道的であり、リフレインを多用。神への賛美というよりも、救霊の道具的役割へ。その影響は今日にまで。

聖歌、讃美歌は、主ご自身を賛美する賛美歌が少ないのが現状。例：「聖さ」をたたえる賛美は「聖なるかな」以外に、探すのが困難など。中田（1969）は、聖歌、讃美歌は「絶対的」でなく、賛美歌を変容させること、新しい賛美歌が生まれることを期待していた。今後、多くの主への新しい歌を歌うことが、期待されている。

・結論

- I. 賛美の本質的側面（聖書的側面）と現象的側面（音楽的側面）は、はっきりと認識することが求められる。
- II. 礼拝における賛美は、4つの視点を認識し、バランスよく賛美することが求められる。
- III. 今の時代の新しい賛美が生まれていくことが必要。



神学校卒業

の証し

4年課程

前橋セントラルBC

こいだ ひろまさ
恋田 寛正

主の聖名を賛美致します。

学校生活も主が共におられ、主が備えられた道を肅々と歩むことが出来ました。先生方の祈りと助け、心を注いでお祈り下さった諸教会の兄姉の皆さま、本当にご心配おかけし申し訳ございませんでした。そして、ありがとうございました。

私は、夜間高校を卒業したらスグに神学校に行こうと目標を定めていたのですが、最後の高校生活の1年間で考えさせられました。劣悪な環境で育った私は、全てにおいて未熟未達の者でした。いくら働きながら家計を支え、苦勞して夜間高校を卒業してもアウトローの労働者。社会で人間関係を構築してもそ

これまで。私が伝える福音と救いの事は、人としての信条やアイデンティティに関わることで、なかなか聴いて頂けません。厳しい社会で働く方々の基準は、仕事で何を成しているか。どのような実績をあげたか。社会にどのような形で貢献しているか。生き様と人間性を幅広い尺度で測られます。当時の私は、彼らに認められる実績と人間性を持ち合わせていませんでした。

また、福音を伝えるには、その対象となる現役社会人の基準とご苦勞を知らなければ、相手にされなくなると示されたからです。この日本では、相応のキャリアを積まないと、人は聞く耳を貸してくれません。私自身の人間性のレベルを上げなければなりません。そういうことから45歳くらいまで管理職などの社会経験を積み、神学校に行こうと考えを改めました。

そして、これまで主に信仰を保って頂き、自己形成（教会生活、仕事、勉強、地域貢献など）に努めてきました。幾度も死と直面する厳しい現実の社会で、上司、同僚、部下、友人・知人共に、励まし合ってきました。こうして獲得してきた「友」と「信頼」。関わりを持たせて頂いた相手を深く理解することで認められ、まだまだ僅かですが、未信者の方々へ様々な角度で福音をアプローチすることが出来るようになりました。

今までの経験を通して1ペテロ2:18-20の御言葉が心に沁みるまで理解させられました。この御言葉に従うことは、強い信仰の意

志を持ってことごとくに祈り、耐え忍ばなければ自分が自分であり続けられません。自分を見失ってしまいます。厳しい社会におられ、辛酸をなめておられる現役社会人（会社員・経営者）の方々に、霊と心の拠り所であるイエス様を知って頂き、イエス様と共に人生を歩み共に礼拝をおささげし、その方々にお仕えして参りたいと願っています。

卒論紹介

「終末論研究」

1、研究の目的

1) 組織神学の終末論でセカンドチャンス論を論駁するという課題が与えられた。

→聖書解釈について大きな隔たりを感じるに至った。

2) 新聞各社が発するアメリカのイスラエルに対する動向。

→イスラエル大使館のエルサレム移転を強行した。

これら2点の共通項は「終末論」と「聖書解釈」である。それらを概観し研究した。

（教科書となりえるような作りとした。）

3) 研究は2部構成

第一部 - 卒業論文 -

1章：終末論の定義

- 1、終末観に対する一般的見識
- 2、日本人の終末観と死生観
- 3、聖書の終末論

2章：聖書解釈について

- 1、聖書は神の言葉か

- 2、聖書の権威
- 3、靈感の解釈
- 4、部分靈感をもう少し掘り下げて見る
- 5、自由主義神学、近代主義神学の終末論
- 6、考察

3章：セカンドチャンス論の聖書解釈上の考察

- 1、説明
- 2、旧約聖書における死後の状態
- 3、新約聖書における死後の状態
- 4、中間状態（肉体死後）の場所（空間）
- 5、セカンドチャンス論の聖書的根拠の起因

聖句

- 7、字義的解釈に基づいて
- 8、考察と結論

4章：新約聖書の神の国

- 1、「神の国」と「終わりの時」と教会
- 2、「神の国はすでに来た」とする聖句・
・実現された終末論
- 3、神の国はキリストの初臨のときから徐々に拡大していく
- 4、「神の国は未来にやってくる」とする聖句

聖句

- 5、終末論は個人的なものか
- 6、まとめ（神の国の4つの側面）

5章：ダニエル書預言と黙示録

- 1、帝国興亡と神の国到来の預言
- 2、ダニエル書 70週の預言

6章：終末の見解とまとめ

- 1、再臨
- 2、復活
- 3、御子は世界の聖徒を集めるー私たちは出迎える

- 4、審判
- 5、第二の死 - 神に背を向けた人々の最後は
- 6、新しい天と新しい地と聖徒たちの祝福

第二部 - 卒業論文を支持する研究資料 -

- 研究資料1 契約神学と救済史
- 研究資料2 4つの再臨説とその歴史
- 研究資料3 信条における終末観
- 研究資料4 イスラエルの「祝福」「のろい」「回復」

おわりに

再臨を望む私たちのあるべき態度と姿勢

私たちは、福音を感謝し、主と深く交わり、「礼拝」「宣教」の務めを守り、主にあって生き生きした生活を送り、神さまから与えられた本業を社会において粛々しながら待つことである。そこで、はじめて地の塩、世の光として証しできるのである。信仰者を通して、神さまの憐れみが満ち、社会に平和が及び、未信者が信者に接しキリストに関心を持つように変えられるのである。



卒業カンファレンス 卒業式説教者
ケネス・ボード宣教師

新入生の救いと召しの証し



救いの証し

4年課程1年
横浜B B C

張替 道雄

私は神様の憐れみと恵みによりクリスチャンホームで育ちました。家庭にて聖書の教育を受け、CSに通い、礼拝で毎週みことばを聞き、恵まれた環境が当然のように整えられておりました。小学生の頃は、礼拝、CSのお話よりも、毎週行われていたソフトボールの練習を楽しみに教会に通っていました。しかし、徐々に学びを深めていく中で主は働いてくださいました。1989年の小3のスプリングキャンプにおいて語られたメッセージを通し、自分自身の罪を示され、イエス・キリストの十字架の死・復活を信じることができました。確信をいただいた聖書箇所は「神は実にそのひとりごをお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が一人として滅びることなく永遠のいのちを得るためである。」ヨハネ3:16この確信のみことばは、あらゆるときに救いの原点に立ち返ることができます。1989年8月6日に礼拝で公の信仰告白に導かれ、同年11月19日にバプテスマを受けることができ教会に繋がることができ

ました。

しかし、不信仰な私は、大学時代、神様よりもテニスを優先してしまい、教会生活も疎かにし、兄弟姉妹達との交わりも断ち、神様との関わりを自ら拒みました。そんな時に、3トントラックとの接触事故が起き9時間の意識不明と頭、足に20針以上も縫うような事態が起きました。その時に神は両親、親戚を通し今の現状では神様に喜ばれないとこと、また悔い改めるべき実情を指し示してください、悔い改め神に立ち返ることができました。「わたしはあなたがたに悟りを与え、いくべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて助言を与えよう。」詩篇32:8

「主はあなたを行くにも帰るにもいまよりとこしえまでも守られる」詩篇121:8

神を信仰し歩む環境は当たり前では無く、ただただ一方的な主の憐れみである事を日々痛感しております。神様は生きて人生に介入し、働いてくださるということを確認持って証しすることができます。これから先、目の前に何が起こるか分かりませんが、如何なることが起ころうとも、万軍の主が共におられるので恐るるに足りません。何がおころうとも「彼に信頼する者は、失望させられることがない」と、「神を恐れよ、神の命令を守れ。これが人間にとって全てである」とみことばにあります。すべては主の御手のうちで起きていること、神は様々な事柄を通し信仰の高嶺へと導こうとしておられることを心に刻み主に信頼し歩んで参ります。

召しの証

主の素晴らしいお名前を賛美致します。

GCという歯科材料メーカーに2003年に入社し2019年7月31日まで営業畑を16年歩んでまいりました。内容はインプラントシステムを歯科医院・病院へ導入ご提案、フォロー、OPEサポート等です。会社の歯車となり営業目標達成に向けて働いていましたが、いつも空しく心は満たされずにおりました。

主からフルタイム献身の召しを示されたのは4・5年前よりメッセージを通して、みことばを通して、「あなたは、わたしに従いなさい。」"ヨハネの福音書 21:22 主は私に迫られました。しかし、私は①私が仕事を辞めたら残された後輩に迷惑がかかる②16年も働いた会社を辞めて今後生活していけるのか③自分のような若輩者が主に仕える器かなどの理由をつけ決心に辿り着く事ができずじまいでした。

そんな日々の中で、妻が2018年宣教カンファレンスのホワイト先生のメッセージを通し、主の召しに従いフルタイムの決心に導かれました。同年2018年9月より神学校生活が始まり、平日の別居生活が始まりました。聖霊に満たされ帰ってきて、みことばから教えられた事を分かち合う妻の姿を見て、羨ましくもありました。現状を見つめ直し、主のみことば慕い求め、主に祈りました。主は、その後も様々なメッセージを通し、みことばを通し主は「あなたは私に従いなさい。」のみことばを持って私に語り続けられました。



そして、2019年宣教カンファレンスに於いて吉田宣教師のメッセージを通し、収穫は多いが働き手が限りなく少ないことを強く示されました。「収穫は多いが働き手が少ない。」この地上での刈り取るべき収穫があること、働き手が少ないことを自分の事として考えることができました。この地上に於いて刈り取るべき収穫、福音宣教の働きの重要性を強く示されました。そして、2019年3月31日主日礼拝のアブラハム契約のメッセージを通し、私に介入してくださいました。「アブラムは、主が告げられたとおりに出て行った。」創世記12:4

主の御声を聞いているなら、先は分からなくとも一歩踏み出すべきである。みことばは、足のともしびだから足元を照らし、進んだら、またみことばを通し次なる道が示される。それが信仰であると、強く示されフルタイム献身の決心に導かれました。

「収穫は多いが、働き手が少ない。だから収穫の主に、収穫の為に働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」マタイ9：37～38 主に全てをささげ働き手としてお委ねし、謙遜にお仕えして参ります。

教師紹介

教師たちに自己紹介をしていただきました。第一回目は5名の先生方です。次回に続きます。



「真理への愛」 石川 実 調布BBC

私は、子どもの頃から探求心が旺盛でした。物心ついた頃、愛用の道具はねじ回しでした。家にある、時計・ラジオ・アイロン・扇風機・掃除機など、すべて分解していました。中身を知りたかったのです。私の高校の同級生たちは、「予想通り石川はエンジニアになった。」と言いました。会社で工作中、チャイムがなったので昼食に行こうとしたら、そのチャイムは終業の知らせであったくらい、熱中していたこともあります。ある意味、「変人」です。

ところが、そのように見えない？のは、友人に恵まれていたからでしょう。自分と異なるタイプの人たちとも、無理をしないで友だちになれました。彼らから色々なことを教えてもらいました。

大学1年生の時に、クラスメートから教会に誘われ、イエス様を信じることができました。私は真理である聖書を探求し、福音を伝える者へと変えられました。多くの友にまさるイエス様が友となって下さったことは最大の恵みです。

神学校において、同じ志をもっている神学生や同僚の先生方と共に、真理を探究できる日々を感謝しています。



「自己紹介」 加治佐 清也 上越BBC

「組織神学4（教会論）」や「福音と文化」などを受け持つことになりました、上越BBCの加治佐です。神学校の学びを通して主のご栄光が現れるよう、祈りつつ取り組んでいきたいと思っています。お祈りいただければ感謝です。

私が神学校で学んだのは20年ほど前のこと。4年間、様々な科目を学びましたが、ただ知識を得るだけで終わるのではなく、学びながら自分を見つめたり、聖書が本当に教えていることに目が開かれたり、神様がどのようなお方かを深く示されて心動かされたり、ということがしばしばありました。神学の学びと霊的訓練は、切り離せないものであることを実感しました。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉があります。私の住む新潟県上越市は、有数の米所。秋には、たわわに実った稲穂が風に揺れて、金色の海のように美しいです。その美しい光景を作る稲一本一本が穂の重みで頭を垂れています。本来、神学を学び知識が豊かになることは、この稲穂のように、人を謙遜にし、主の前にへりくだらせるものだと思います。学べば学ぶほど、心低くされ砕かれていく。そういう学びを分かち合えればと思います。よろしく願いいたします。



「自己紹介」 白井 清之 希望の丘BBC

私は、2019年度の神学校において「組織神学」と「基督教倫理」及び「思想史」の授業を担当します。私は、この群れに導かれて37年になりますが、この群れを通して救いに導かれたことを主に感謝しており、この群れに対して誇りを持っています。何故なら、多くの教派が自由主義やカリスマ的神学に流れて行く時代の中で、フェローシップは、戦後一貫して、聖書の無謬性を告白する保守的な神学を堅持して来たからです。この群れの70年の祝福の原点は、そこにあると信じます。そして、保守的な神学の牙城は、何と言っても神学校であり、私は、そこに所属する一教師として、神の御言葉に堅く立つ伝道者を世に送り出したいと願っています。御言葉を教える私自身が足りない者ですので、神学校の働きが支えられ、群れの祝福の為に多くの献身者が起こされるようお祈り下さい。



「奉仕の始まり」 白石 公章 八千代BBC

私が神学校での奉仕を始めるきっかけになったのは、故杉浦校長からのお電話でした。科目は新約緒論でした。不思議でした。実は卒業後、しばらくして神学校の集まりで、どんな授業があったら良かったか？と尋ねられる機会があり、緒論と答えたからです。私の時は3年課程でしたので、この科目はありませんでした。2年ほどの期間があり、前任教師からの引き継ぎ、参考図書を集めることから始めました。幸いに義父がキリスト教出版社に長年勤務していましたので大変助かりました。授業ノートを作りながら、神学生の時に、これを学んでおきたかったと感じたことを指針として、授業を担当しました。

数年後、もう一科目担当することになりました。聖書史地理でした。今度も!と声が出そうになりました。これも私が神学生の時には無かった科目でした。どちらの科目も、聖書そのものというよりも、その周辺部分を扱う科目ですが、だからこそ聖書信仰にたつ私たちにとって、信仰の立場を明確にして学ぶ必要のある内容でした。

教師の中でも最も小さな者ですが、フェローシップの伝道者養成という世界宣教の働きの一端を担わせていただいていることに、大きな感謝と誇りをもって自分の務めを果たしていきたいと願っています。



「担当科目について」 三谷 ^{ひろし}浩司 平塚BBC

担当科目①「宗教の神学」

以前は「比較宗教学」と呼ばれていましたが、「数多くある諸宗教とはいったい何なのかをキリスト教信仰の立場から問い、研究する神学」です。「宗教の神学」の必要性としては、①宗教の普遍的存在の意味について考察する、②諸宗教を客観的に知ることによって、キリスト教信仰が独善的になることを防ぐ、③諸宗教を学ぶことによって、より効果的に福音を提示していくことが可能になる、④キリスト教信仰の独自性を確信する、ことがあげられます。

担当科目②：教会史 I

教会史とは、キリスト教大辞典によると「キリスト教の起源とその発展とを歴史的に探求することによって、その本質的意義と一般文化との関わりとを的確に理解しようとする学科である」と定義されています。しかしそこにとどまらず、①“神様が歴史の主”であることを前提として、教会および教会を取り巻く世界の歴史を概観することにより、歴史の背後にある神様の御手のわざを覚えること、②教会が時代の流れの中で、どのように福音の世界的宣教が拡大していったか、また教会がどのように世と関わり、その影響によって初代教会の姿から変容していったかを理解すること、③それらを通して、今の混沌とした時代の中で、どうすれば教会が世に流されずに堅く立って行けるかを考察することが、教会史の学びの重要な目的です。

神学校の思いで

渡部良次・喜美子(阿部) 市原BBC
第27期卒(1984年)

神学校生活三年間は、私にとって今までの歩みの中で一番濃厚な三年間でした。授業でも初めて聞く言葉・考え方、驚きの毎日でし

た。聖書を見る見方を教えて頂きました。勉強の苦手な私にとってレポートを書く事、卒論なんて勿論、必死で課題をクリヤするためには神学校の交わりも十分出来ないほどでした。体力的にも、水曜日と金曜日は授業が終わると同時に奉仕教会に飛んで行く。本当によく続けることができ、卒業させてもらえた

と思っています。いろいろな先生方がおられ、またお交わりをさせて頂き、今も指導・アドバイスを頂く事が出来るのも感謝です。

開拓伝道にとの思いがありましたので、奏楽の練習も私なりに力を注ぎ、全然弾けない者でしたが、田口先生が指導して下さい、課題を必死にクリアできるように時間を拾って練習したことを思い出します。当時、ピアノのあるチャペルの二階が男子寮で、勉強されていたりアルバイトをして疲れ休んでいる方もおられる中、外れた音ばかり聞かせ今更ながら申し訳なかったと思っています。最後に、同期の姉妹と「ブリッコトリオ」と称し、賛美をたくさんしたのがとても良い思い出です。(喜美子)

神学校の思い出として極めて個人的なものとなるが、一年生前期終了間際の1月16日(土)朝、アルバイト帰りに原付を運転中交通事故に遭い、内臓破裂の重傷を負い、66日間の入院生活を通らされた事である。

医師の診断によると、肋骨6本が折れ、肺、脾臓、脾臓、腎臓に多大な損傷があり、助かる確率は20パーセント未満であるとの事でした。この時、神学校ではキング校長の指導の下、徹夜祈祷、24時間祈祷体制がとられ、誰かが常に祈っている事となった。諸教会にも祈りの要請がなされ、主の恵みとあわれみに支えられて奇跡的な回復が与えられて神学校の学びに復帰できた。

本来なら授業時間不足、十分な科目の履修

も出来ていないとなれば、復帰できても一学年からもう一度やり直しが当然であった。しかしここでも奇跡？が起こった。同級生のノート写し、レポート提出、夏休み中の補習授業受講で一学年をクリアし、新年度からは二年生としてスタートさせて頂いた事である。

卒業と同時に結婚し開拓伝道を始めて35年、相変わらず劣等生の歩みではあるが、このような者でもここに至るまでこの働きを継続して来られたのは、只々キング校長を始め先生方、先輩方や同期の方々そして諸教会の兄弟方の祈りの中で、主があわれみ支えて下さったからである。

最後に、キング校長から私に語られたお言葉を紹介させていただきます。

「厳しく責めよう他人の過ち、笑って過ごそう自分の過ち。」とことん自分中心の私の歩みを見透かされ、掛けて下さったこのお言葉を、今も肝に銘じて歩ませて頂いている。感謝な学びであった。(良次)



編集後記 今回を持ちまして、神学校だよりの担当をバトンタッチします。お忙しい中、快く原稿依頼を引き受けてくださりありがとうございました。引き続き、神学校のために祈りいただければ幸いです。 白石公章